

江戸文林切絵図



冬樹社

著者略歴 野口武彦（のぐちたけひこ）

1937年6月，東京に生まれる。東京大学大学院国文学
修了。神戸大学文学部助教授。文芸評論家。

著書

『三島由紀夫の世界』（講談社）『石川淳論』（筑摩書房）
『江戸文学の詩と真実』（中央公論社）『吠え声・叫び声・
沈黙——大江健三郎の世界』（新潮社）『谷崎潤一郎論』
（中央公論社）『頼山陽——歴史への帰還者』（淡交社）
『徳川光圀』（朝日新聞社）『花の詩学』（朝日新聞社）他。

江戸文林切絵図

1979年6月21日 初版第一刷発行

著 者 野口武彦

発行者 高橋直良

発行所 冬 樹 社

東京都千代田区神田神保町3—27—6

電話 東京03(264)0346(代)

定価 2300円

印刷・製本 図書印刷株式会社

©Takehiko Noguchi 1979 Printed in Japan
本書の内容の一部。あるいは全部を無断で複製機器等
いかなる方法によっても複製複製することは，法律で
認められた場合を除き，著作権および出版社の権利の
侵害となりますので，予め小社の許諾を求めて下さい。

江戸文林切絵図

目次

I

鎖国下の思想と文化	9
歴史意識と頼山陽	24
『四書集註』から『講孟余話』まで	41
西郷隆盛の学問的体質	47

II

思想的和文の系譜	55
新井白石・荻生徂徠・本居宣長	
本居宣長における詩語と古語	72
宣長歌学の詩的意味論	105
本居宣長と紫式部	116
『源氏物語玉の小櫛』小論	
悪と幽冥	131
平田篤胤	

III

藤本箕山	色道哲学	143
浮世草子の方法	井原西鶴	151
創作意識の構造	上田秋成	163
江戸期小説の言語構造	曲亭馬琴・山東京伝	177
化政度的なるものの原質	四世 鶴屋南北	196

IV

近親相姦と文学的想像力	217
江戸随筆の雑識消化力	239
花の名は人めきて——萩原広道	244
あとがき	269
初稿発表書誌	272

装幀 井上孝彦

江戸文林切絵図

鎖国下の思想と文化

Ⅰ 鎖国時代とは何か

日本は島国である。アジア大陸の東北の辺境に位置し、四周を海に囲まれ、わずかな水路をへだてて中国・朝鮮と近接する日本の地理的環境は、古来、たえず大陸文明の影響を受けながら、たちまちこれを同化摂取するという独自の文化的性格をつちかてきた。その核心には常に土着的なものを保ちながら、周囲に対しては開かれていたという条件を考えなければ、日本民族形成期以来のわが国の思想と文化の特質を理解することはできないだろう。ただし、周囲とはいっても、十五世紀の終りまで、それは文字どおりの四周ではなかった。文化受容の源泉はもっぱら中国大陸にあり、東北アジア文化圏といわれる一つの「世界」の内部で日本は文化的に開いた空間であつたといえよう。

日本は島国である。しかし、世界中でただ一つの島国であつたわけではない。アイスランド、イギリス、シシリー、キプロス、キューバというふうに数えあげてみればわかるが、世界中の島国は

それぞれまったく別個の歴史をたどっている。なぜそれらが異なった文化発達の径路をたどったかを説明するためには、たんに地理的環境を考えるだけでは決して充分ではない。政治史との関連も当然考慮されなければならないだろう。その意味で、日本の鎖国時代の文化と思想は、まことに興味深い問題を提供する。鎖国とはもともと江戸時代の政権担当者によってなされた国家の対外関係にかかわる政治的決定であった。しかし、いったん国家体制として固定されるや、それはあらたに對内的に強力な反作用をもたらしはじめる。鎖国は、日本の文化史上はじめて、そして例外的に、わが国が閉じた空間であるような状態を人為的に作り出したのである。

それが日本にどのような歴史的条件と、文化発展史上の特質を刻印したかは、たとえば、世界でも有数の島国であるイギリスと比較してみれば明らかだろう。十九世紀には地球上のほとんどの海を支配下におさめる大海洋国家イギリスも、一五七〇年頃までは、つまり日本の戦国時代の末期までは、まだ赤道の南に進出していなかった。地球全体を一つの空間とし、西欧諸国の植民地とする土地占有競争のさきがけとなった大航海時代には、イギリスは遅れて参加したのである。のみならず、イギリスが世界海洋政策を国家の方針として採用したのは一六五〇年代、日本の鎖国のわずかな数十年後のことであった。積極的に海に乗り出すいわば開かれた政治的決定と、海に背を向けて島国に閉じこもる政策選択。そのちがいの収支決算を二百年の後に迫られることになったのが、当の鎖国政策をうちだした江戸幕府であるといえよう。

江戸幕府は、最終的には寛永十六年（一六三九）、国法として日本人の海外渡航とオランダ・中国以外の来航貿易を厳禁した。それからほぼ二百年後の安政元年（一八五四）、アメリカ極東艦隊

の圧力によって開国を余儀なくされるまで、日本は長崎という狭い窓口を除いては、全世界にびったりと門戸を閉ざしていた。これがいわゆる鎖国時代である。つまり慶長八年（一六〇三）の江戸開府から慶応三年（一八六七）の大政奉還まで、およそ二百六十年続いた江戸時代は、そのほとんどが鎖国時代であったということになる。というより、かくも長期にわたる政権安定は、鎖国体制によって保障された一面もあるといった方が正確だろう。鎖国方針を採用したときが徳川政権が軌道に乗ったときであり、開国はその命運がつきつきかけになった。

江戸幕府がなぜ鎖国を強行したかの理由については、従来、キリスト教の徹底的禁圧のためであったとする説が有力である。とくに、寛永十四年（一六三七）の島原のキリシタン一揆鎮圧に手を焼いた幕府は、これを危険思想として根絶するために海外との接触を断つことに踏み切ったというのである。当時発布された鎖国令の箇条から見ても、これは正しいだろう。だが最近の研究は、鎖国が同時にまた、対国内的な中央集権政策の一面も持ち、江戸幕府が諸大名から外交権・貿易権を取り上げて一手に独占するための布石でもあったことを明らかにしている。鎖国という政治的決定のこの両面性を理解するためには、秀吉および家康の時代までは、禁教と貿易とを別箇に切り離して扱おうとする政策がとられていたことを知っておく必要があるだろう。カソリック宣教師の布教活動は厳禁するが、貿易そのものは許容するといういわば政経分離方式である。これがしだいに手づまりになっていったところに、三代將軍家光による鎖国への踏み切りの必然性が生じたと見ることができよう。

なぜ禁教と貿易の二分方式は手づまりになったのか。一つには、当時のキリスト教の布教活動の

性質があげられる。処刑をも怖れず日本に潜入したポルトガル宣教師は、ジェスイット派（イエズス会）と呼ばれる世界的な規模の教団に属していた。その宗教的情熱が真摯なものであり、またそれが、たとえば島原一揆の反封建権力闘争の一種のイデオロギー的支柱になっていたことはたしかである。だが同時に、その布教活動は、十六、七世紀におけるカソリック大国の海外進出と密接に結びついていた。マホメットの右手にコーラン、左手に剣ではないが、ジェスイット派にとっては、異民族をキリスト教に転宗させることとそれを利用して植民地経営の拠点を作ることとの間には何の矛盾もなかった。現に秀吉の時代、クリシタン大名大村氏などは、長崎をそっくりイエズス会に寄進してしまったほどである。

一方、貿易についてもまた、幕府はこれを無制限に奨励することはできなかった。もしも西国大名が自由に外国と交易したら、その結果はたんに多大の富を得て幕府を脅かす勢力になりうるのみならず、大名領国はよしんば自由都市化しないまでもいわば大公国化し、幕府は全国掌握力をいちじるしく弱めるだろう。江戸幕府がもっとも危惧したのはそれであった。だから幕府は参割符衆と呼ばれる一部の特権商人を使って海外貿易の窓口を一本化し、またその制限額を定めた。貿易による商品流通は、どこまでも幕藩体制がよって立つ基礎であるところの封建経済の現状安定を脅かさぬ範囲のものでなければならなかった。鎖国とはこのように、創立後間もない江戸幕府が複雑な国の内外の条件のもとで取った苦肉の策だったのである。

世界史的規模で問題を眺めるならば、鎖国政策は、それまで東北アジア文化圏の一隅にあってそれなりの開かれた安定性を保っていた日本が、最初に西欧世界と接触してひきおこした全国家的な

反作用であったといえる。文化史的に言えば、それまでせいぜい内海と沿岸の航海技術しか知らなかった民族——東シナ海は太平洋の内海である——が、いきなり大洋航海の技術をもって全地球に勢力拡張しつつある国家との遭遇にひきずり出されたのである。それは一面ではたしかに強烈な文化的刺激であり、日本人の一部が積極的に南蛮貿易に乗り出し、マカオ・ルソン・シャムなどに進出する気運をも作り出した。大洋文化への参加という開かれた反応。しかし、それを見殺しにするかたちで強行された鎖国は、まったく反対に、日本の文化圏を閉じた界域に局限する方向をたどったのであった。

十七世紀はじめの極東海域は、植民地的土地占有をめぐるカソリック諸国とプロテスタント諸国との争奪戦の最遠隔の前線であった。オランダに拠点奪取の意図がなかったわけではない。日本から駆逐されたポルトガルがより前近代的だったというだけの話である。こうした西欧の進出への対応策として取られた鎖国は、いってみれば全国土をあげての籠城戦であった。カソリック側を主敵とし、プロテスタント側に中立を宣言することで、日本は海に囲まれた防禦陣地にたてこもった。当時の日本にそれが可能であったのは、西欧両勢力の対立という条件もあったが、それ以上に、彼等の航海術と軍事力の相対的均衡という要因があったからであった。鎖国の後、日本が二百年の太平の夢をむさぼっている間に、いつしか航船と小火器の時代は過ぎ去り、蒸気船と大砲の時代がそれに代っていたのである。

2 鎖国文化としての封建文化

鎖国体制が江戸時代の日本にもたらしたものが、一種の「国際的孤立状態」（岩生成一「鎖国」）であつたことはたしかである。鎖国の結果、わが国は十六世紀に南蛮貿易を通じて保っていた西欧と東南アジアとの交流のみならず、かつての中国大陆との文化的交渉をもかえって狭めることになつた。日本の鎖国と相前後して中国大陆では明が滅亡し、清が建国された事情もいっそうこの傾向を助長する。封建農業経済を維持する程度に制限された海外貿易は、そのまま文化史上の事象にもアナロジカルにおきかえられる。海外の文物や情報の移入も極度に抑制された江戸時代の大半の時期は、いわば文化的な自給自足の状態にあつたのである。

中世封建時代のヨーロッパについて、カール・シュミットは「海上からの撤退、艦隊の欠如、完全な領土主義化」（『海と陸』）などの特徴を列举し、ひとくちにこれを「陸国化の時代」と呼んでいるが、それはほとんどそのまま江戸時代の日本にもあてはまるだろう。徳川幕府が専心していたのは諸国諸大名の知行権の掌握であり、それとても日本全土の既有的土地を改易や所替えによって再分割すること以上のものではなかつた。秀吉の朝鮮半島出兵はいかなる意味でも道義ある戦争ではなかつたが、そこにはまだしも領土取得の気宇があつた。滅亡に瀕した明の出兵依頼を拒絶した江戸幕府は、ただひたすら眼を自国の内陸に向け、国内最大の封建領主としての、また幕藩体制の統率者としての権力安定のみを意図していたのである。もちろんわたしは事の是非を論じているので